

## 佐々博雄教授の定年退職にあたって

考古・日本史学コース主任 秋山哲雄

このたび、平成三十一年三月をもって、本学文学部史学地理学科考古・日本史学コースの、佐々博雄教授が定年退職なさいます。まだまだお元気な先生なので、もつと一緒に仕事をしたいところですが、大学の規定により定年退職となりました。退職にあたり、コース主任の立場から、惜別の辞を述べさせていただきます。

佐々先生は、昭和二十三年に熊本県でお生まれになり、昭和四二年に熊本県立済々黉高等学校を卒業され、国士館大学に入学しました。昭和四七年に国士館大学を卒業後、中央大学大学院に進学し、昭和五〇年に修士課程を修了されました。ほぼ同時期に、外務省外交資料館で「日本外交史事典」編纂担当の事務を勤めるかたわら、日本大学第二高等学校の非常勤講師もご経験なさいました。昭和五十一年に国士館大学文学部史学地理学科国史学専攻の助手となつて以降、長きにわたつて、国士館の教壇に立つていらつしゃいます。そして平成三〇年度が、その最後の年となつてしまいました。この間、考古・日本史学専攻の専攻主任を四年間お勤めになり、後には文学部教務主任を二年担当なさつて、専攻や学部の運営にご尽力なさつてきました。

佐々先生のご専門は近現代外交史です。特に外交史に関しては、時代を選ばず古代から現代にいたるまで幅広い知識をお持ちです。学生の卒業論文の執筆については、ゼミ生を一人ずつ研究室に呼び、テーマ設定から史料の探し方、読み方などを丁寧に指導してこられました。学生が先生を頼りに研究室におじゃますることも多かったよう

です。なお、佐々先生の研究業績は、紙幅の都合により、後掲の「略歴・主要業績」をご覧ください。

本学文学部に三期生として入学し、その後、助手の任を担ったこともあつて、佐々先生はこれまでの国士館のあらゆるを一番詳しくご存知の方です。国士館大学開設九〇周年、同一〇〇周年の事業に携わつたのはその証左です。教授会に出れば、問題となつている話題のこれまでの経緯を、すらすらとご教示いただきました。酒宴の席などでも、いろいろなことを次々とお話いただき、おかげで私も国士館に詳しくなりました。教員だけでなく職員との関係も深く、事務的な情報も、佐々先生からうかがうことが多々ありました。

私が国士館大学に奉職した際に、佐々先生は専攻主任を担当なさつており、着任前からいろいろとお世話になりました。佐々先生は、私と同じ子年生まれで、私より二回り上の年齢となります。二四歳離れた佐々先生は、私にとって父親のような存在でした。私が湯島に住んでいた頃は、帰る方向が同じなので、よく一緒に千代田線で帰宅していました。先生と二人で一杯飲んだあと、電車に乗つたところ、二人ともウトウトしてしまい、湯島を大きく過ぎてしまいました。戻る電車がなかったため、そのまま先生のお宅に泊めていただいたことを、昨日のこのように思い出します。確か、娘さんがご結婚されて家を出た後の部屋で寝かせていただいたと記憶しています。その時はさすがに恐縮するばかりでしたが、寛容な先生の人格を強く感じたできごとでした。

佐々先生はもち肌です。女子学生が「佐々先生の美肌うらやましい」と言うほどに、肌はつるつるです。とても今年度に定年退職なさる方とは思えません。見た目年齢で言えば、実年齢と一五歳くらいは違うように見えます。

私は吹き出物が多く、先生のもち肌をうらやましく思っているうちの一人です。そのもち肌のおかげか、いや、確実にご人徳と教養の高さから、佐々先生は特に女子学生に人気があります。卒業式の前日の謝恩会では、先生との写真を撮りたがる学生が列をなしています。花束を抱え、女子学生に囲まれた先生の写真撮影会は、毎年の恒例

行事です。もちろん男子学生も、先生からうけた恩を忘れず、卒業してからも佐々先生のもとに顔を出しに来たりします。教え子の結婚式によばれることもしばしばでした。もちろんそれは、普段から真摯かつ丁寧な教育をなさっていたからこそであります。

見た目だけでなく、気持ちも若いのが佐々先生です。健康のためだといって階段を一段飛ばしで駆け上がる先生は、コースの教員のなかで最初にスマホを導入し、学生とラインで連絡をとりあうなど、最新ツールに手を付けるのが早く、おしゃれにたくさんのジャケットを着こなし、TPOに合わせた時計をはめかえるなど、そのセンスには脱帽です。脱帽といえば、近年流行の帽子も着こなししています。

佐々先生は、学内の部活動である「国史学研究会」を立ち上げた方でもあります。大学での講義やゼミ以外で、古文書を手にする機会を学生達に与えるために、この会では古文書を読んでいます。夏休みには、妙高出身で先生と同期である後藤氏の家の蔵から出てきた古文書の実物に触れることができます。

この「国史学研究会」は、佐々先生と古文書の魅力にとりつかれた学生達が、自主的に運営しています。この研究会のメンバーは結束力が強く、大学でドロップアウトする学生を抑制する役割も担っていたと感じています。彼らはまじめに古文書の勉強をしています。この研究会での活動をとおして、彼らはリーダーシップを身に付け、大人の礼儀や他人との関わり方も学び、たくましい社会人として巣立っていきました。

考古・日本史学専攻の教員で、先生の還暦をお祝いしたのが、まるで昨日のこのようです。まだまだ佐々先生がいらっしゃると安心していたら、すぐに一〇年が過ぎてしまいました。これからはもう先生に相談できないとなると、個人的にはとても不安ですが、私も独り立ちしなければならぬ立場となりました。先生から受けた薫陶を胸に刻み、大学教員としての仕事をこなしていこうと思います。

佐々先生。長い間、お勤めご苦労様でした。大変お世話になりました。これからはゆっくり休んで、大好きな温泉巡りを楽しんで下さい。本当にありがとうございました。